

第 18 回年次大会 研究発表要旨

英土翻訳に見る不定冠詞と指示詞：キャサリン・マンズフィールド「園遊会」の分析

藤田 晃代

近年、トルコ人研究者や翻訳者による英文学作品のトルコ語への翻訳が益々盛んになっているが、モダニズム作家のキャサリン・マンズフィールド（Katherine Mansfield, 1888-1923）による「園遊会」（“The Garden Party”, 1922）とシャーダン・カラデニズ（Şadan Karadeniz）によるトルコ語翻訳版 “Bahçe Partisi” を語法に注目して比較考察するのが本発表の目的である。トルコ語には英語の不定冠詞に相当する数詞 *bir* が存在する一方で、定冠詞 *the* に相当する語がない。そのため、当然のことながら英土翻訳に際して原文の定冠詞を含んだ文を訳出する際には文脈からの読み取りで処理、または他の語、特に指示詞への言い換えが必要になる。考察にあたっては、英語の不定冠詞同様、トルコ語の *bir* も新情報をもたらす指標として機能するが、他の名詞に比較して当該の名詞をとりたてて表現する際に特に使われる傾向が強い点を指摘、また、トルコ語では定冠詞の代わりに英語の *this* に相当する指示詞 *bu* がときに定冠詞的なはたらきをすることを論じ、翻訳にあたってマンズフィールドの作品にどのような変奏をもたらしているのかを考察する。

『失樂園』における結婚の生産性——創造能力の誤用としての Sin—— 江藤あさじ

近世キリスト教社会において、結婚はしばしば出産を通じた生産的営みとして理解されてきた。しかしジョン・ミルトンは、離婚論において結婚の本質を理性的対話と精神的共同体の形成に求めており、生産性の意味を単なる生殖に限定していない。本発表は、この生産性の問題を『失樂園』における Sin の表象を通して再検討するものである。

『失樂園』において Sin は、死（Death）を生み出し、さらに地獄と地上を結ぶ橋を建設するなど、作中でも際立って創造的かつ生産的な存在として描かれている。しかし彼女の生み出すものは、いずれも罪と死の拡散を促し、神の創造秩序を崩壊へ導く。加えて、Sin の出産はイヴの出産を想起させながらも、その苦痛が永続的に反復される点で生命ではなく死を再生産する反創世記的な母性として表象されている。本発表は、Sin の創造行為を「創造能力の誤用」として捉えることで、ミルトンが悪を単なる欠如ではなく、神から与えられた能力が脱創造へ転化する過程として描いていた可能性を考察する。

『結婚式のメンバー』におけるフランキーによって込められた旅の意味 加藤 良浩

カーソン・マッカラーズの『結婚式のメンバー』（*The Member of the Wedding*）は、精神的な孤独をテーマにした作品だが、そこで描かれる孤独とは 12 歳の少女フランキーが子供から大人に成長する際に感じる性の問題、すなわち成長に伴って彼女が体現すべき女性の性の問題に起因している。孤独な彼女は、持続的な暑さが象徴する閉塞的な雰囲気南部を越えて他の人々とのつながりを求めようとする。彼女は暑さが続く南部とは対照的な雪の舞うアラスカの地を最も訪ねることを望むものの、その地にとどまらず世界各地を巡ろうとする。結局彼女は、兄と彼の花嫁の結婚式のメンバーになるという夢が打ち砕かれたため、彼らと一緒にの旅行は断念するが、その後知り合ったメアリ・

リトルジョンと世界一周をしようとする。こうして、世界各地を自由に巡ろうとするフランキーの憧れは、性に対する志向、すなわち男性性と女性性を求めようとする彼女のいわばクリアな性の志向と密接な関係があるのではないか。

アール・デコ様式の日本への受容—旧朝香宮邸の成立過程

安室可奈子

1933年5月に竣工した旧朝香宮邸（現・東京都庭園美術館）も、日本における主なアール・デコ建築のひとつである。1923-25年までフランスに滞在していた朝香宮鳩彦王が、1925年パリ万国博覧会を訪問、その様式美に魅せられ、帰国後、アンリ・ラパンに設計を依頼して建てさせた。

1925年4月28日にパリで幕を開けたパリ万国博覧会は、また「現代装飾芸術・工芸美術博覧会」とも呼ばれ、アール・デコ（Arts Déco）という新しい装飾様式を主流として押し出した万博でもあった。この時ラパンはフランスのパヴィリオンの装飾に携わっている。

本発表では、この旧朝香宮邸の建築、室内装飾と日本におけるアール・デコ様式の需要について、同時代の批評、報道資料等を参照しつつ報告したい。

生成 AI 時代における辞書利用について

今 佑介

本発表は、生成 AI の普及に伴う大学生の英語学習行動および辞書利用の実態を明らかにし、今後の英語辞書に求められる役割と記述の方向性を検討することを目的とする。近年、ChatGPTをはじめとする生成 AI は、語義説明、英文作成、和訳、英作文添削、例文生成、文法説明など、英語学習の多様な局面において利用可能となっている。一方で、生成 AI による回答には、情報の不正確さや根拠の不透明性が含まれる可能性があり、学習者には提示された情報を批判的に確認する姿勢が求められる。

本発表では、大学生を対象としたアンケート調査に基づき、生成 AI、翻訳アプリ、検索エンジン、オンライン辞書、電子辞書、紙辞書等の利用状況を分析する。特に、意味確認、英作文添削、例文作成、類義語理解、コロケーション確認、文法・語法確認といった場面において、学習者が各ツールをどのように使い分けているかに注目する。

以上の分析をとおして、生成 AI 時代における英語辞書の意義を再定位し、学習者の参照行動の変化を踏まえた今後の辞書のあり方について考察する。

第 18 回年次大会

連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」趣旨

発起人 鵜崎 敏彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろ

ん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者 28 5 ラウンドシステムにおける文法指導の在り方の検討—検定教科書における文法事項の出現傾向に焦点を当てて— 北島 翔汰・杉山 碧人

5 ラウンドシステムの授業はこれまで大きな成果を上げてきた（金谷他, 2017）。しかしその一方で、同指導法における文法指導の位置づけには依然として課題が残っている（北島, 2025）。そこで本発表では、5 ラウンドシステムの中にどのように文法指導を体系的に位置づけ、継続的に指導していくかを検討する。具体的には、発表者の勤務校で使用している中学校英語検定済教科書（Here We Go! English Course 1～3）での教科書本文を分析対象とし、教科書内にて示されているシラバス上の文法事項の配列と実際の本文中における出現頻度について、3 年間を通した学年横断的な分析を行う。分析を通じて明らかになった出現頻度の傾向（偏りやばらつき）を基に、各文法事項への明示的な指導時期や指導比重を検討し、5 ラウンドシステムにおける 3 年間の連続した効果的な文法指導の在り方を提案したい。

第 18 回年次大会 特別講演要旨

Parthenon 神殿を見つめる Byron を自己誇衒化して描いた、伝 Eastlake 画が拠って立つ読みとは？ 笠原 順路

近景の Byron が、あたかも遠景の Parthenon 神殿に目を向けているように描かれた油絵がある。所蔵館によると本作は、Charles Lock Eastlake の手になるとされている。その反面、来歴表記が「Eastlake に帰属 (attributed to Eastlake)」に留まっている資料や証言もあり、ことによると Eastlake の名を騙った贋作である可能性も否定できない。いずれにせよ本作には、制作者の不確実さとは裏腹に、Byron の特定の詩行の精緻な読解に基づく画面構成が見て取れる。本講演では、まず、この「伝 Eastlake 画」が拠って立つ当該詩行の読みを、自我意識の拡大と縮小の観点から他の Byron の詩行とともに提示する。あわせて、仮に本作が贋作であるならば、制作者はなぜ、Byron の当該詩に材を取った作品で知られていた J. M. W. Turner ではなく、あえて Eastlake の名を使ったのか、という美術史・文学史の交差点に浮かぶ謎についても考察を加えたい。